

横田の空兵と米陸軍、JPMRC 24-02で任務即応性を強化 *Yokota Airmen, US Army improve mission readiness during JPMRC 24-02*

February 26, 2024

By Airman 1st Class Natalie Doan
374th Airlift Wing Public Affairs

アラスカ州エルメンドルフ・リチャードソン統合基地発—横田基地第36空輸中隊の空兵は2月8日、アラスカ州エルメンドルフ・リチャードソン統合基地 (JBER) で行われた「統合太平洋多国籍即応能力センター (JPMRC) 24-02」において、米陸軍第11空挺師団第2歩兵旅団戦闘チームの隊員とともに統合強襲演習 (JFE) を実施した。

陸軍主催のJPMRCは北極環境での作戦に備える年次演習で、寒冷地での大規模な戦闘能力を磨く、状況対応訓練と実弾演習を目的としている。今年は2月22日まで行われる。

演習中、第36空輸中隊のメンバーは4機のC-130Jスーパーハーキュリーズで、第11空挺師団の空挺隊員200人を空輸した。そして空挺部隊は、模擬敵地への空挺強襲を行った。

第36空輸中隊は今回の空挺降下を成功に導くため、何か月も前から陸軍と調整を行ってきた。そのため航空機搭乗員たちは、エルメンドルフ・リチャードソン統合基地に到着後は、戦術的な側面に焦点を当て任務を実行することができた。

演習に先立ち、任務計画の最終日に航空機搭乗員全員が一堂に会した。ロードマスターがパイロットと対等に肩を並べて任務計画班に加わったのは、今回のJPMRC 24-02が初めてである。地上作戦と空中投下計画に精通した専門官として、演習の様々な側面を調整し、必要な条件を定めた。

第36空輸中隊ロードマスター教官のケイリン・スタバ軍曹は、「これまではパイロットがすべてを行っていたが、ロードマスターは皆豊富な訓練・経験を積んでいる点において、これらの任務を細部にわたって遂行する適任者だ。これこそがC-130コミュニティにおける任務計画の未来像であり、今後はロードマスターの中心的な専門分野になっていこう」と展望を語った。

パイロットとロードマスターの連携が、第36空輸中隊にとって非常に有益であることが実証された。

第36空輸中隊C-130Jパイロットのジョーダン・ペクト大尉は、「計画の段階で搭乗員全員が参加することで、訓練当日、搭乗員同士の連携やコミュニケーションが円滑に行われた。メンバーたちが前日から情報共有できていたため、JFEでの飛行任務は容易に行うことができた」と語った。

しかし、演習には課題もあった。各輸送機には50人ももの空挺隊員が搭乗しており、第36空輸中隊は一度に空挺隊員全員を安全に投下することができなかった。そのため、事前に計画した戦術・技術・手順を実践して、可能な限り早く投下地帯に戻り、後続の人員投下を行った。

ペクト大尉は、「JFEは、C-130パイロットにとって非常に特別な機会だ。4機の輸送機をアラスカに持ち込み実働訓練することで、大いにスキル強化できた。大規模な編隊の基本から、実際の必要な条件を満たすための調整、不測の事態を想定した計画まで、あらゆることに重点に置かれた」と説明した。

第36空輸中隊は、任務のこれらの重点をシュミレートし、本拠地で定期的に訓練を行っている。JPMRC訓練は、同中隊が現実的なシナリオにも基づいて統合部隊とともに任務準備態勢の強化を図る機会となっている。

ペクト大尉は、「陸軍と共に演習を行う機会があればいつでも参加し、身につけてきた力を試したいと思う。訓練の機会をフルに活かし、部隊間の相互コミュニケーション、任務変更時の対応、優先度のバランスをとる練度を高めることができる」と語った。

